

新今宮観光インフォメーションセンター設立の経緯と運営戦略

国際ゲストハウス地域の創出に向けた活動報告 その1

The Establishment and Management Strategy of Shin-Imamiya Tourist Information Center:

Progress Report on Social Practices for the Creation of International Guesthouse Area Part.1

松村 嘉久*・佐藤 有**・有村 遊馬***

MATSUMURA Yoshihisa, SATO Yu and ARIMURA Yuma

JR 大阪環状線新今宮駅の南側は、あいりん地域や釜ヶ崎と呼ばれる寄せ場でありドヤ街であるが、近年、外国人個人旅行者 (Foreign Individual Tourists : 以下は FIT) を積極的に受け入れて、新今宮の国際ゲストハウス地域へと変貌しつつある。その変貌をさらに促す重要な転機になると予想されるのが、2009年7月の新今宮観光インフォメーションセンター (以下は新今宮 TIC) の開設である。本発表では、新今宮 TIC の開設が切望された地域的背景を概説し、同施設が設立されるまでの経緯にふれ、新今宮界隈のまちづくりや国際観光振興と絡めて、新今宮 TIC の機能や役割を整理して運営戦略を位置付けたい。

キーワード：大阪・西成・あいりん・釜ヶ崎・新今宮 (Osaka, Nishinari, Airin, Kamagasaki and Shin-Imamiya), まちづくり (Community Building), 都市再生 (Urban Rejuvenation), 観光インフォメーションセンター (Tourist Information Center), 社会的実践 (Social Practice)

1. はじめに

JR 新今宮駅の南側一帯は、近年、海外からの FIT を積極的に受け入れ、釜ヶ崎やあいりん地域と呼ばれる「ドヤ街」から、新今宮の「国際ゲストハウス地域」へと変貌を遂げつつある (松村 2009)。その主な要因には、1泊700円から3,300円の簡易宿所が集積するという強み、関西の著名な観光地や関西国際空港への交通アクセスが抜群に良く、近隣に新世界や通天閣などの観光スポットもあるという良好な立地条件が挙げられる。この他に、簡宿経営者を中心として、まちづくり志向の強い大阪国際ゲストハウス地域創出委員会 (以下は OIG) が 2005年3月に結成され、地域社会に様々な働きかけを行いながら、地域として FIT を受け入れようという機運を高めてきたことも見逃せない。

現在、新今宮で生起しつつある国際ゲストハウス地域への変貌は、タイのカオサンなどが歩んだ過程とは異なる方向を目指している。タイのカオサンの場合は、海外からの旅行者にサービスを提供するという一点の

みに向かって、地域社会の多様な空間編成がドラステイックに変容し収斂していった (森 2007)。その過程において、従来からのカオサン住民は他所へ移り住み、商機を求めて流入してきた外来者が空間変容を促進した。いわば一種のジェントリフィケーションが生じたわけであるが、住民はほぼ入れ替わり地域社会は著しく流動化した。新今宮の場合は、従来からある簡宿に FIT を誘致して再活性化し、その活力を周辺の既存社会資源へと波及させ、漸進的に地域全体を底上げしようと試みている。その過程において、既存の地域社会は変貌するが存在意義を持ち続け、日雇い労働者や生活保護受給者を社会的にも空間的にも排除することなく、共存共栄の関係性を構築することが重視されている。

新世界が観光地として再発見された新今宮界隈では、FITのみならず日本人旅行者の来訪も増えている。この地域のまちづくりは、急増する来訪者のニーズを探り地域全体としてもてなすため、来訪者と地域社会とを時には適切につなぎ、時にはすみわけを促し、互いに

*阪南大学国際コミュニケーション学部・教授 **阪南大学国際コミュニケーション学部・学部生
***大阪大学人間科学部・学部生

良好な関係性が構築できる道筋を模索すべき段階に入った。以上のような問題意識のもと、本稿では、新今宮の変貌をさらに促す転機になると予想される新今宮TICに注目して、それが開設されるまでの経緯を紹介し、まちづくりや国際観光振興と絡めて、その機能や役割を整理して、運営戦略を位置付けたい。

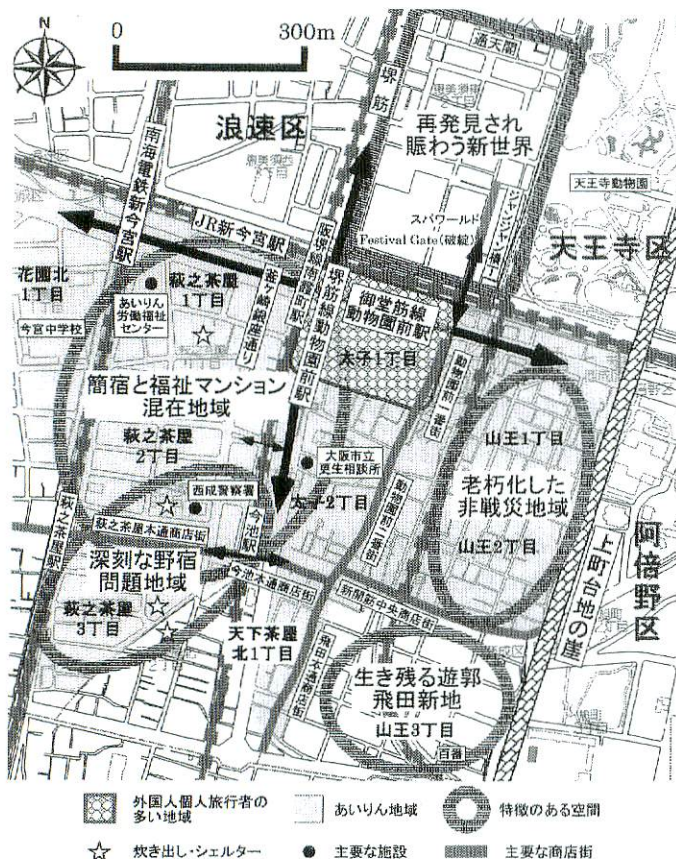


図1 新世界からあいらん地域にかけての空間編成
 注) あいらん地域の範囲は参考文献の水内俊達ほか(2008)の297頁に準じた。

2. 新今宮 TIC 設立の経緯

(1) 新世界からあいらん地域にかけての概観

図1に新世界からあいらん地域にかけての空間編成を示したが、特筆すべきは、表情の全く異なる特徴のある空間が隣接するにも関わらず、線形の物理的障害で空間が分断されている点である。浪速区と天王寺区の行政境界であるJR環状線の高架が、新世界とあいらん地域を南北に分断している。環状線南側の西成区を西から見ていくと、まず南海電鉄の高架があり、堺筋のすぐ西側を走る阪堺線の土手があり、阪神高速の高架があり、上町台地の天然の崖があり、狭い空間をまさに寸断している。新世界とあいらん地域を、また西成区側の東西を往来できる道路やガードは限られてい

て、とても特徴のある分断された空間が、隣接するものの互いに往来しにくい状況で共存している。

このような空間編成から、これまで結果的に、再発見され賑わう新世界、FITの多い地域、深刻な野宿問題地域などが、モザイク状に絶妙にすみわける形で、互いに目立った交流も対立もなく共存できた。一方、新世界の賑わいはジャンジャン横丁の南端で途切れ、環状線のガードをくぐり動物園前一番街へ入ると、元気がないシャッター商店街となる。新世界や飛田新地やFITの多い地域から堺筋を西へ渡り、深刻な野宿問題地域へと迷い込むことも稀であった。しかしながら、この状況は、来訪者が急増するにつれて変わりつつある。

(2) 急増するFITと日本人来訪者

FITの多い地域は太子1丁目である。08年、太子1丁目に立地する7軒の簡宿(中央・中央新館・来山南館・来山北館・みかど・東洋・太洋)で、実ののべで6万泊を超える外国人宿泊者を記録した。この7軒がOIGの中心的存在であるが、FITを受け入れている簡宿は他にもあり、08年にこの一帯で、少なくとも7万泊のFITを受け入れたと推察できる。1日平均で200名近い外国人が新今宮界隈を闊歩していることになる。新今宮界隈もリーマンショックの影響を受け、08年末からFITは減少したが、09年夏には回復した。

新世界が観光地となり、図1に示した地域に日本人来訪者も急増している。たいていの日本人の目的地は、ジャンジャン横丁から通天閣にかけての新世界である。どの駅のどの出口から降りようか、おおよそ通天閣を目指して歩を進める。図1に示した地域のステレオタイプな印象を持つ日本人ならば、あいらん地域へは、深く立ち入らないよう心がけるであろう。しかしながら、新世界を目指す最近の日本人のほとんどは、あいらん地域に対する認識も情報もなく、それゆえに偏見もなく来訪する。

新世界へ誘う駅構内の案内表示は不十分ながらもあるが、出口から外へ出ると、ランドマークたるべき通天閣は全く見えない。また環状線の高架があるため、環状線の南側から北側へ抜ける道は、堺筋とジャンジャン横丁の2本しかない。加えて、JR新今宮駅西出口と南海電鉄新今宮駅は、通天閣のある浪速区側に出口がなく、西成区側のあいらん労働福祉センターの前にしか出られない。このような事情から、制服を着た修学旅行のグループなどが、あいらん地域周辺を彷徨うことも珍しくない。

一方、FIT は新世界を目指す者もいるが、むしろ、FIT 受け入れ実績のある簡宿が集積する太子1丁目を目指す者が多い(図2参照)。太子1丁目の街路は単純明快であるが、ネット予約した簡宿をなかなか捜しあてられず、重い荷物を担ぎ地図を片手に持ち、あいりん地域を彷徨うFIT も少なくない。あいりん地域内にはOIG加盟の17軒の簡宿以外にも、70軒くらいの簡宿が営業している。そのほとんどはFIT や女性客に対応していない簡宿であるが、最近では、あいりん地域内を歩き回り、より安い宿を探すFIT や日本人も決して少なくない。

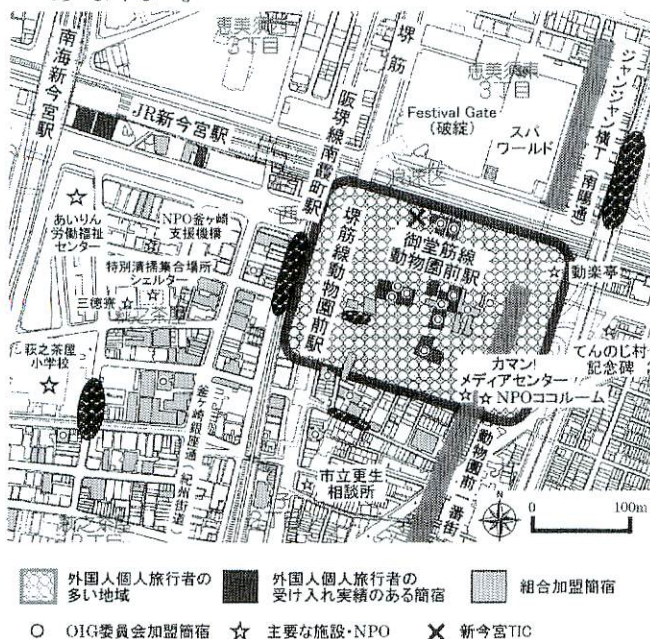


図2 国際ゲストハウス地域の創出をめぐる現状

(3) 地域社会の内実と急がれる対応

あいりん地域内の地域社会の内実に目を転じると、実に様々な営為者が存在する。主なところでは、日雇い労働者、新住民である生活保護受給者、昔からの地元住民、FIT、日本人来訪者、簡宿や商店の経営者や従業員などであるが、これに問題を抱えた人々も加わる。これらの営為者や図1に示した「特徴のある空間」の間には、とり結ぶべきものもあれば、すみわけた方が望ましいものもあり、とり結ぶべきでないものもある。

FITに限定するならば、ここ数年で急増してその活動圏が拡大傾向にあるにも関わらず、日雇い労働者や生活保護受給者とのトラブルは皆無に近い。今後も、この関係は大きな問題にならないであろう。FITの受け入れ実績のある簡宿の周辺は商業地域なので、地元住民が少なく旅人慣れしているため、そこのトラブルもない。商店の経営者たちは、FITの来訪を歓迎している

か、無関心のどちらかである。FITと問題を抱えた人々との交流も、現時点では見受けられないが、両者の活動圏はすでに一部で重なっている。

こうした地域的背景のなか、例えば、簡宿組合からは、FITの旅のニーズに対応でき、誰もが利用でき、観光情報を広く提供する施設の開設が期待された。FITや日本人の来訪を待ちわびる商店からは、それらと直接つないでくれる存在が切望された。より広い観点からは、地域社会の内実を見極めながら、無用の軋轢を最小限に抑え、多様な営為者や特徴ある空間の間の関係性をうまく調整する組織が待望された。

このような状況認識のもと、OIGにて、産学連携で、FITに観光情報を提供して滞在環境も向上させ、地域社会との調整役も担えるような組織を何とか生み出せないのか、という議論がなされた。何ができるのか、どこまでできるのか、全く先が見通せない段階で、松村がゼミに持ち帰り相談した。その結果、ゼミ生が主体となって、期間限定で試験的に新今宮TICを運営して、成果と課題をまとめることになった。それらを踏まえて、次の段階へ踏み出すべきか判断しようということになり、簡宿組合とOIGの全面的支援も決まった。

3. 新今宮TICの試験的運営の成果と課題

(1) 新今宮TICの試験的運営と成果

試験的運営の期間は、阪南大学の長期休暇にあわせて、09年1月26日から2月27日までと定め、日曜を除いて毎日、9時から16時まで運営した。実際に新今宮TICを運営するので、FITのニーズに対応することが何よりも重要であった。しかしながら、そもそもどのようなニーズがあり、どの程度まで学生ボランティアで対応できるのかを推し量り、将来に向けての課題を見出すことも重要であった。実質31日の試験的運営での利用者は、197件351名あった。利用者の国籍は30数ヶ国におよび、オーストラリア人54件、日本人23件、北米20件、中国(香港・台湾)18件、韓国15件の順に多かった。学生ボランティアはのべ186名もが参加した。

最大の成果は、メディアに注目されFITから感謝されたこともあり、学生ボランティアたちにやる気と充実感が芽生え、教育的効果の高いことが確認されたことである。英語でのコミュニケーション力があっても、観光地理知識がなければ全く対応できない、逆に、観光地理知識があっても、コミュニケーション力がなけ

れば伝わらない。FIT のニーズに何とか対応しようと努力するなかで、学生たちはお互いの能力を補完しあう形で、自然とチームワークを覚えていった。

(2) 試験的運営から見出された課題

試験的運営では、FIT から以下に挙げる観光情報の提供を求められることが多かった。

- ・関西圏の著名な観光地へのアクセスや観光情報
- ・地元新今宮界隈での滞在や生活に関わる情報

また、具体的な観光情報の提供と言うよりも、旅行プラン自体の立案に関する相談も目立った。目的地案内が主な業務の TIC では考えられないであろうが、「今から私はどこへ行けばいい、お薦めのところはありますか」という類の質問が少なくなかった。

運営を実際にマネジメントした経験から、常設運営に向けて見出された課題は、①十分な数のボランティアの確保とそのシフト組み、②ボランティアのコミュニケーション力や観光地理知識など総合的な対応能力の問題、③日々入れ替わるボランティア間でどのように情報を共有するのかという問題、などであった。

(3) 新今宮発の関西各地へのフィールドワーク

新今宮 TIC を常設運営する可能性を探っていた 09 年 4 月末、ホテル中央グループが太子 1 丁目に「オアシス」を新築開店することになり、そのモニター宿泊の依頼が松村研究室に came。このモニター宿泊を利用して、ゼミでは「新今宮からの日帰り観光をフィールドワークする」という企画を立ち上げた。のべ 50 名を超える学生が、13 チームに分かれ、新今宮から JR や私鉄を利用して、京都・京都郊外・奈良・法隆寺・神戸・姫路・高野山・大阪市内などへと向かった。

調査は、①日本語のわからない FIT のまなざしで移動し行動し観光する、②FIT が独力で観光できる環境にあるか検証する、という観点からなされた。試験的運営で FIT に対応した学生たちの戸惑いは、自分が行ったことのない目的地も紹介する点にあった。姫路城へ行く場合、「JR 大阪駅で姫路行きの新快速に乗り換えて」と情報提供するが、経験のない者は全くイメージできない。そもそも FIT はあの複雑な大阪駅の構内で姫路行きの新快速にたどり着けるのか、という疑問もあった。

試験的運営で問合せの多かった観光地へ実際に行き、その経験を共有できれば、自信を持って案内できるはずである。常設運営を始めるには、数多くの学生ボランティアの積極的参加が前提条件となる。そこで、こ

のフィールドワーク企画を新今宮 TIC の常設運営に向けた準備と位置付け、広く学生たちに参加を呼びかけ、その参加者を新今宮 TIC の運営スタッフに勧誘することで、関西圏の観光地理知識を共有する人材の量的確保を試みた。実際、新今宮 TIC の常設運営でスタッフとして活躍した学生の大半は、このフィールドワークに参加している。この調査企画の翌日は、新今宮界隈の現状をつぶさに見て回った。

4. 新今宮 TIC の主な機能と運営戦略

最後に新今宮 TIC の主な機能と運営戦略を簡単にまとめておきたい。この施設は当然ながら、FIT に様々な観光情報を提供し、FIT からの旅の相談を受けるところである。主な機能としては、ラグビーのスタンドオフのように、FIT を関西各地の観光地、地元の商店街や社会資源につなぐ役割が期待されている。

ただし、単に観光情報を提供する場ではなく、学生ボランティアが集まるという特性を活かし、国際観光振興や FIT の動向に関する調査研究活動を行い、大阪国際ゲストハウス地域の創出に向けたまちづくりの拠点として、様々な社会的実践を行う場でもある。こうした社会的実践は、観光の現場と大学での高等教育との間を弁証法的に結び、その行き来のなかで学生ボランティアたちの様々な能力が向上する場ともしたい。

謝辞：本稿で述べた活動・調査では、ホテル中央グループの山田英範社長や西口宗宏 OIG 会長ほか、簡宿スタッフや地域の方々、新今宮 TIC の開設・運営に携わったゼミ生や学生たちに大変お世話になりました。ここに記して感謝いたします。

【参考文献】

- 1) ジェイコム ビジターズインダストリー研究所 (2009) : 大阪を訪れる外国人個人旅行者に関する調査報告書, 政務調査 (柳本顕 大阪市会議員), pp.54.
- 2) 松村嘉久・濱中勝司 (2008) 外国人個人自由旅行者の実態報告 : 釜ヶ崎の簡易宿所でのアンケートと聞き取り調査から, 日本観光研究学会第 23 回全国大会論文集, pp.117-120.
- 3) 松村嘉久 (2009) 大阪国際ゲストハウス地域を創出する試み (神田孝治編「観光の空間」ナカニシヤ出版), pp.264-274.
- 4) 水内俊雄・加藤政洋・大城直樹 (2008) : モダン都市の系譜 地図から読み解く社会と空間, ナカニシヤ出版, pp.292-301.
- 5) 森聖太 (2007) : 東南アジアのバックパッカー・エリアに関する研究, 神戸大学大学院 総合人間科学研究科 博士論文.